

# 中国の「續命神幡」

——インド風呪術に用いられる小道具——

小林 信彦\*

## A

### 「延命神幡」の起源に関する中国の伝承

仏教で死とは身体を取り替えることである。身体が機能を停止すると、心は新しい身体に移転して新しい人生が始まり、これが限りなく繰り返される。命を延ばすことは、身体を取り替える時期を遅らせること過ぎず、仏教の目指すことではない。したがって、仏教には延命という発想がなく、延命に効果のある道具が用いられることもない。

ところが、中国には“續命神幡”とか“延命神幡”とかいう表現があり、道世が668年に編纂した『法苑珠林』に、その起源を伝える説話が『迦葉詰阿難經』から引用されていて、“重病になった「阿育王」(aśoka)は、1200の塔に金糸の旗を立て、健康を回復して25年の延命に成功した”と言う。

迦葉詰阿難經に云ふが如し。昔、阿育王、自ら境内に於て、千百塔を塔を立つ。王、後に病に困む。一沙門有りて、王の病を省ぬ。王、言ふ。「前に千二百塔の爲に各金縷幡を織作す。手で自ら幡を懸け華を散じて、始て成辨せむと欲す。而して重病を得。恐くは願を遂げざらむ」と。道人、王に語りて云ふ。「王、好く手を又て心を一にせよ」と。道人、即ち神足を現じ、時に應じて、千二百寺、皆、王の前に在り。王、見て歡喜す。便ち金幡金華を取りて諸刹の上に懸けしむ。塔寺、皆、低昂をなす。即ち皆王の手に就く。王、本願を得て、身、復た病愈ゆ。即ち大意を發して壽二十五年を延ず。故に「續命神幡」と名づく<sup>1)</sup>。

ここに“成辨”という語が見える。日本の真言宗には「對揚」(應對稱揚)というフォーミュラが伝えられていて、その末尾に“所願成辨 金剛手菩薩”とあり、所願の「成辨」に言及してコンガウシュ(金剛手/vajra-pāṇi)を称える。この用例から按ずるに、「成辨」は

\*本学文学部

1) 道世、『法苑珠林』36、『大正新脩大藏經』53, p. 568, 14-22: 如迦葉詰阿難經云 昔阿育王自於境内立千二百塔 王後病因 有一沙門省王病 王言 前爲千二百塔各織作金縷幡 欲手自懸幡散華始得成辨 而得重病 恐不遂願 道人語王云 王好又手一心 道人即現神足 應時千二百寺皆在王前 王見歡喜 便使取金幡金華懸諸刹上 塔寺皆低昂 即皆就王手 王得本願身復病愈 即發大意延壽二十五年 故名續命神幡

キーワード：續命、神幡、五色、轉讀、魂の復帰

「成就」と同じ意味で用いられるらしい。「望みを成就する」という意味で用いられているのであろうか。

## B

## 延命効果が期待される中国の「神旛」

玄奘（600-684）の訳した『薬師琉璃光如来本願功德經』<sup>2)</sup>には、「ラピス・ラズリの光を放つブツダ」への礼拝を記述する箇所に、“續命神旛”という表現が見られる。

時に彼の病人の親屬，知識，若し能く彼が爲に世尊薬師琉璃光如来に歸依し，諸の衆僧を請じて，此の經を轉讀せしめ，七層の燈を然し，五色の續命神旛を懸けば，或は是の處に彼の識の還るを得る有り。夢中に在るが如く，明了に自ら見む。或は七日，或は二十一日，或は三十五日，或は四十九日を経て，彼の識の還る時，夢より覺むるが如し<sup>3)</sup>。

ブツダに礼拝する際に灯（*pradīpa*）や旗（*dhvaja*）を供ええる習慣がインドにある<sup>4)</sup>。ところが、この中国語文献によると、旗（五色の神旛）の機能が「續命」にある。“諸の衆僧を請じて，此の經を轉讀せしめ，七層の燈を然し，五色の續命神旛を懸けば”と指示されているのは、延命呪術ということになり，“是の處に彼の識の還るを得る有り”という表現は、この一連の呪術作業の効果に言及していることになる。

さて、玄奘が作成した中国語文では、この「續命神旛」に五種の色がついている。“五色”または“五采”と言って、黄と青と赤と白と黒の五つの色をまとめる習慣が中国にあった。「五方」（上/東/南/西/北）の天帝には「五色」が対応し、香の煙の昇る方向によって、どの天帝が降りて来るか分かる仕組みになっているのである（上なら黄帝，東なら青帝，南なら赤帝，西なら白帝，北なら黒帝）<sup>5)</sup>

色の数が五つであることについては、「五行」<sup>6)</sup>の伝承が基盤にあった可能性がある。パー

2) 「薬師琉璃光如来」という名前の意味は、「医療の大家であり，ラピス・ラズリの光を放つブツダ」(*bhaiṣajyaguru-vaīdūrya-prabha tathāgata*)である。東の方角にはガンガー河の砂の数を10倍した数の「ブツダの国」がある。そのすべて通り過ぎると、「ラピス・ラズリの光を放つ都」(*vaīdūryanirbhāsā [nāgarī]*)があり，そこには「医療の大家であり，ラピス・ラズリの光を放つブツダ」がいるのである (*Bhaiṣajyaguruvaidūryaprabharājasūtra*, ed. Dutt, 1939, pp. 2-3)。

「ラピス・ラズリの光を放つ都」は、中国語で“琉璃光淨土”または“淨琉璃世界”と言われ、「医療の大家であり，ラピス・ラズリの光を放つブツダ」は“薬師琉璃光如来”と言われた。人々の苦しみを治療する薬師如来は，医療の大家に擬せられたのである。

3) 玄奘譯，『薬師琉璃光如来本願功德經』，『大正新脩大藏經』14，p. 407，b. 19-29: 時彼病人親屬知識 若能爲彼歸依世尊薬師琉璃光如来 請諸衆僧轉讀此經 然七層之燈懸五色續命神旛 或有是處彼識得還 如在夢中明了自見 或經七日或二十一日或三十五日或四十九日 彼識還時 如從夢覺

4) *Saddharmapundarikasūtra*, ed. Kern & Nanjio, St.-Petersbourg, 1909, 16 *Puṇyaparyāyaparivarta*, p. 337, 6-7: …… pūjayet satkārayed vā puspadhūpagandhamālyavilepanacūrnacīvaracchatradhvajapatākābhis tailapradīpair vā …… ||

5) 『太上靈寶五符序』下，『道藏』6，p. 336，c.5-8: 氣正上者 中央黄帝先降 氣東流者 青帝先降 氣南流者 赤帝先降 氣西流者 白帝先降 氣北流者 黒帝先降

6) 「五つの要素（木/火/土/金/水）が天地を構成する」という文化伝承が古くからあり，これを“五行”と言う。この「五行」のアイデアは南北朝時代（420-589）から中国で仏教に取り入れられるよ

ンボーム (Raoul Birnbaum) によると、“五色神旛”が表すのは“the five elements in harmony”である<sup>7)</sup>。身体を構成する要素の不調和に病気の原因を帰すアイデアが確かに中国語仏教文献にあり、3世紀前半)、「延命」の効果を考えると「五色神旛」は要素の調和を象徴するのがふさわしい。

ただし、仏教では「要素」の数が5ではなく4である。『佛説佛醫經』によると、「身体を構成するのは、地と水と火と風の4要素であり、その調和が破れると、404種の病気になる」という<sup>8)</sup>。仏教で構想された「不調和理論」に中国の「五行」説が取り入れられたのであろうか。

対応するサスクリット・テキストには<sup>9)</sup>、この“請諸衆僧轉讀此經 然七層之燈 懸五色續命神旛”という部分が欠けている。それもそのはず、この部分のサスクリット・テキストは、命の尽きた者の延命などに言及するものではなく、奇跡をもたらす呪術は意図されていないのである。そもそも「延命」などという発想はインド文化にないのである<sup>10)</sup>。

ここにはインド文献に対応表現が見られない“轉讀”という語が用いられている。命を引き伸ばす呪術の一環として特殊な朗読法に言及している。“轉讀”という語が指すのは、「[声の高さや長さや強さを] 変えながら読むこと」/[節を付けて唱えること]である。経典を声を上げて読むこと自体が呪術実践のための音声パフォーマンスとなっていて、テキストの理解はどうでもよい。仏教経典のテキストは、真理を伝える文ではなく、奇跡を引き起こすのに有効な音声呪術の素材である。

このように経典を朗読する習慣はインドになく<sup>11)</sup>、中国の文化伝承を受け継ぐものと考えられる。道教文献には『度人經』を朗読する効果についての記載がある。1月と7月と10月に朗読会が行われるという。1月には死んだ人の靈魂を救うために、7月には自らが不死になるために、そして10月には「帝王・國主・君臣・父子」の幸せのために、『度人經』を朗読する催し行われるのである。

正月の長齋に、世の亡魂を上ぐる爲に是の經を誦詠す。…… 七月の長齋に、是の經を誦詠して、身神仙を得。…… 十月の長齋に、帝王國主君臣父子の爲に是の

うになった。

7) Raoul Birnbaum, “Seeking Longevity in Chinese Buddhism,” *Journal of Chinese Religions*, 13/14, 1985/1976, p. 156.

8) 『佛説佛醫經』, 『大正新脩大藏經』17, pp. 737-738.

9) *Bhaisajyaguruvidyāprabharājasūtra*, ed. N. Dutt, Calcutta, 1939, pp. 24-25: tatra ye te mitrajñā-tisalohitās tasyāturyārthāya taṃ bhagava[ntam] bhaisajyaguruvidyāprabham tathāgatam śaraṇam gaccheyus tasya [ca] tathāgatasya pūjām kuryuḥ | sthānam etad vidyate ya[t] tasya tad vijñānam punar api pratinivarteta [I] svapnāntara-gata ivātmānaṃ samjānāti\* | yadi vā saptame divase yadi vā [eka-viṃśatime] divase yadi vā pañcatrimśatime divase yadi vā ekonapañcā-śatime divase tasya vijñānam punar api nivarteta [I] \*写本Cにより、刊本の“samjānīte” (認識する)を“samjānāti” (悔いを抱いて思い出す)に改める。

10) 小林信彦, 「中国人がインド文献の中に読み取る蘇生 —自分の都合に合わせて理解した異文化—」, 『桃山学院大学』国際文化論集』32, 和泉, 2005, pp. 41-65.

11) Sylvain Lévi, “Sur la récitation primitive des textes bouddhiques,” *Journal Asiatique*, 1915, pp. 401-447.

經を誦詠す<sup>12)</sup>。……

“彼の識の還るを得る有り”という文に見える“識”という語は、仏教文献で「心」を指す。延命呪術を行った結果、「彼の識が還るを得る」とすれば、死んだ身体から離脱してどこかよそへ行っていた「心」が元の身体に帰って来ることになる。死ぬはずであった者は死ななかったことになる。

しかしながら、こういうことは、インドの文化伝承の中ではありえない。インドでは、人が死ぬと意識が身体を離れ、他の身体に移る。すなわち、縁もゆかりもない女の胎内に侵入して、新胎児の発生に関与する。元の身体に帰ることはないのである。

それに、死体は直ちに焼いて、骨は川に捨ててしまうから、7日ないし49日経って帰って来ても、戻るべき身体はないのである。延命呪術に言及する玄奘訳『薬師琉璃光如来本願功德經』には、非インド的で非仏教的な生死観が反映されている。

玄奘訳『薬師琉璃光如来本願功德經』で延命呪術の効果に言及する文、“是の處に彼の識の還るを得る有り”は、サンスクリットの文“*tasya tad vijñānam punar api pratinivarteta*<sup>13)</sup>”（その人の心が再び[人間の世界に]帰って来る）を訳したものである。著者の意図に添う限り、心が帰って来る場所は「人間世界」(manuṣya-loka)であって元の身体ではない。これは蘇生に言及する文ではないのである。

人間Aの身体を離れた「心」は、再び人間世界に帰って来て、発生した瞬間の胚に侵入する。この胚は成長して人間Bの身体になる。サンスクリットのテキストで語られているのは、「心」が古い身体から新しい身体に移動する話であるが、『薬師琉璃光如来本願功德經』で語られているのは、死んだ身体に魂が復帰する話である。中国語訳では書き換えられて蘇生が起こる話になっているのである。

## C

### パラダイス行きに効果がある「幡」

敦煌で発見された絵画の中に、“引路菩薩像”と呼ばれているものがある。中国人が想像した「引路菩薩」は、「靈魂をパラダイスへ導く菩薩」であるが、いずれも必ず旗を手にしている<sup>14)</sup>。そうすると、中国人が「幡」に期待した機能には、「延命」だけでなく「往生」があったことになる。

パラダイス行きの効果を期待して「幡」を用いる習慣が中国で成立していたことについては、日本の記録からも示唆される。8世紀の日本では、聖武の1年忌(757)に、「灌頂幡」や「道場幡」が丹波など26国に配布された。これは消耗品ではなく、行事が済むと金光明寺

12) 『度人經』、『(元始无量)度人(上品妙)經四注』1、『道藏』(文物出版社, 1987) 2, p. 197, a.15-16: [道言] 正月長齋誦詠是經爲上世亡魂 ……; b.2-3: 七月長齋誦詠是經身得神仙 ……; c.3-6: 十月長齋誦詠是經爲帝王國主君臣父子 ……

13) *Bhaiṣajyaguruvaidūryaprabharājasūtra*, p. 25.

14) 松本栄一、『敦煌畫の研究』, 「圖像篇」, 東京, 1937, pp. 362-365.

に納めるように指示された。

〔天平勝寶八年十二月の〕己亥，越後，丹波，……等の廿六國，國別に，灌頂幡一具，道場幡卅九首，緋綱二條を頒下し，以て周忌の御齋の莊筋に充つ。用ゐらば，金光明寺に收め置きて，永く寺物と爲し，事に随ひて之を出し用ちふ<sup>15)</sup>。

ここで「幡」は「續命」のためではなく，死後儀礼や忌日儀礼の「莊筋」用に用いられている。「幡」の機能に「往生」を期待した中国伝承を受けたものである。

---

15) 『續日本紀』19, 『国史大系』2, p. 227, 1-4: 己亥 越後 丹波 …… 等廿六國 國別頒下灌頂幡一具道場幡卅九首緋綱二條 以充周忌御齋莊筋 用了收置金光明寺 永爲寺物隨事出用之